みんなの
ための
校長会に

茨城県 学校長会広報

第218号
発行者
茨城県学校長会
会長　長澤　勤
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933－1
教育プラザいばらき内
☎ 029－269－1300
FAX 029－269－1304

特集

特色ある学校経営
行財政・調査研究委員会の要望や取組み
先輩と語る会

目次

○表紙写真に寄せて……1
○特色ある学校経営……2
○行財政・調査研究委員会の要望や取組み……6
○全国女性校長会茨城大会……7
○先輩と語る会……8
○創意を生かした特色ある教育課程……10
○市町村教育委員会と学校長会……12
○特別寄稿・図書案内……13
○ひばり……14
○梅のかおり……16
○支部だより……18

全校朝会で校長が手品
「ナニコレ珍百景」に登録

茨城町立長岡小学校
坂場　安男

「世の中不思議なことがいっぱいある」という思いを込めて、全校朝会で手品を見せています。

子どもたちも、毎月一回の全校朝会を楽しみにしており、親子の話題にもなっています。

五月末に、テレビ朝日の「ナニコレ珍百景」で放映され登録されたことは、子どもが学校に誇りをもつ機会となりました。

特色ある学校経営

特集1

子どもを真ん中においた子どものための学校づくり
―かしこく　やさしく　たくましく―

小美玉・玉里小　矢口　忠衛

表題は今年度の合言葉である。あえて当たり前の言葉を掲げることにより、一つ一つの活動を見直すことができると思う。本稿のテーマは「特色ある学校経営」であるが、日々の地道な活動の積み重ねが子どものためになればよいととらえ、本校の活動の一端を紹介したい。

現在小美玉市は、茨城空港の開港により脚光を浴び、乗降客ばかりでなく見学客も多数訪れ賑わいを見せている。本校は、その南部霞ケ浦の高浜入に面し、西には筑波山を望める風光明媚な農村地域に位置している。

児童数二四三名、学級数一〇、教職員数一六名の小規模校である。創立は明治八年で一三五年になるが、大きな児童数の変化もなく推移し、開発等の波に影響されることもなく、静かに穏やかに少しずつ成長している。保護者や地域の人々も、学校教育に対して協力的であり、昨年には学区コミュニティも発足した。教育環境としては大変恵まれており、子どもたちは素直で明るく元気で、地域の雰囲気そのままに伸びやかに育っている。

一　生きる力をはぐくむ

今回の指導要領の改訂において、「生きる力」は知識基盤社会の時代においてますます重要となり、これまでの内容を継承し、生きる力を支える確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和のとれた子どもの育成を目指している。

本校は校内研修の中心に算数科を位置付け、学習の進め方、ノートの使い方、比較検討場面における話し合い活動の在り方等について、三年間の研究を積み重ねてきた。今年度は、あえて体育科を研究の中心に位置付け、これまでの成果の上に立って、体力の向上も併せて、違った視点からの学力向上を目指すことにした。子どもの興味・関心の高い体育科を取り上げることで、子どもたちは、より意欲的に学習に取り組み、そこから得た力を他の学習にも生かすことができれば、一石二鳥の成果を得られるという目論見である。研修テーマは「運動に親しむための資質能力の育成を目指した授業づくり―学び合い、かかわり合いを通して―」とした。技能の向上、ルールづくり、ゲームでの作戦等を通して、学び合いかかわり合う学習を中心に授業研究に取り組んでいる。その他の活動では、縦割り班活動の工夫、朝や昼休みの体力づくり、玉小標準記録の設定、栄養士と連携した栄養指導等が挙げられる。縦割り班では、二四班によるドッジボール、リレー、大縄跳び対抗戦とし、班の団結力と適度な競争意識を育てることをねらっている。子どもたちの反応を見ながら、より意欲的な活動になるようにしていくつもりである。朝の体力づくりは今年度からの活動であるが、朝の運動により、その後の授業に少しずつ活気が出てきている。

二　コンクールや大会への挑戦

子どもたちの素直さや真面目さを伸ばしたい、自信をつけさせたいという思いから、可能な限り外部の活動に積極的にチャレンジさせている。昨年と今年の取組みと結果は、次のような事が挙げられる。

平成二一年度　合唱（TBS優秀賞、NHK銀賞）三〇人三一脚（四年、北関東六位）

平成二二年度　合唱（TBS優秀賞、NHK銀賞）県歌唱実技講習会モデル校、日清カップ（入賞者二名）

合唱団は、四年生以上の希望者による構成であるが、音楽的な活動は、全校を挙げた活発な活動に発展している。定期的な音楽集会をはじめ、秋の音楽会には、保護者や地域の人々が体育館いっぱいに集まり、大変盛況である。

今後も、子どもたちの無限の可能性を信じて、地道に日々の活動を積み重ねていくことを、職員や保護者と確認しながら、経営を進めていきたい。

教育行政施策による教育活動の活性化
園・校種間・地域との連携による「萩っ子」の育成を目指して

高萩・秋山小　鈴木　宏実

高萩市では、市内の幼児児童生徒を「萩っ子」と称し、市内を小学校区を単位として五つのユニットに分け、園・校種間の連携から、感性と郷土性を併せもつ「萩っ子」の具現化に取り組んでいる。また、昨年度から幼児児童生徒の実態や地域の特色を生かした創造的な取組みを企画・立案・実践し、幼児児童生徒が生き生きと学ぶ学校づくりを目的として、「いきいき萩っ子育成事業」が開始された。

本校では、この事業に園・校種間の連携と地域の高齢者等を活用して教育活動の活性化を図るという内容から応募し、本年度から委託を受け実践している。

教育活動の活性化とは、既存の教育活動を「いきいき萩っ子育成事業」をフィルターとして教育活動の工夫改善を図り、本市のめざす幼児児童生徒像である「萩っ子」の具現化を図ることであるととらえている。

本校では、「いきいき萩っ子育成事業」の実践に向け、園・校種間の連携と地域の高齢者等の活用の二つの視点から運営組織を「ユニット研究部」・「萩っ子研究部」・「サポーター研究部」の三つのグループを編成し、全職員で「萩っ子」の育成に取り組んでいる。

「ユニット研究部」の主な取組みは学力の向上と園・校種間の職員の積極的な交流である。行事参加型の単発的な連携ではなく、連携の視点を明確にし、授業の交流など研修を中心とした職員間の交流をねらいとしている。七月には県教育研修センターの「校内研修支援訪問」を算数と数学の連携から行った。小中間でスパイラルな教育課程を編成して実践することや指導内容の関連性から参観を行い、自己の授業に生かすことなどの指導を受けた。その後相互に授業参観と協議を行い、授業力の向上を小中間の連携から進め学力向上を目指している。

また、幼稚園との交流では、幼稚園の学習活動に本校職員がティームティーチングの形で参加し、学習習慣や基本的な生活習慣の定着について連携を図っている。また、保育園・幼稚園とは評議員として相互に評議員会議に参加し、幼保と連携した教育活動の実践について意見を述べている。

感性と郷土性を併せもつ「萩っ子」の定着は「萩っ子研究部」が具体的な取組みを構築して実践している。

具体的には「はぎッズ集会」による「萩っ子」の具体像の紹介・市教育研究会社会科教育研究部が作成した「萩っ子検定」を自校化した第三・四学年での検定問題の実施や道徳・生活科・総合的な学習の時間における郷土教材の開発などである。

道徳の郷土教材では、社会科の副読本に掲載される長久保赤水等の「高萩三英傑」と呼ばれる先人の生き方について、生活科や総合的な学習の時間では地元を流れる花貫川を取り扱った環境教育などを年間指導計画に位置付け、「萩っ子」育成の具体的な活動を行っている。

「サポーター研究部」は、地域の高齢者等の知識や技能を効果的に活用した教育活動の実践を担っている。

この地域高齢者等の活用は、市が学校支援地域本部事業で進めている「生涯現役社会創出プロジェクト事業」の委託によるものである。地域の高齢者等を「はぎッズサポーター」と称し、教科やクラブ・委員会活動・学校行事で活用を図っている。

保護者に行った「はぎッズサポーター」に期待する内容のアンケートでは、地域をより詳しく学習できることや学ぶ楽しさ、より専門的な指導の実践に期待が寄せられている。また、図書室の司書業務や理科支援員の授業時数の確保など学校が現在抱えている課題からも活用を図っている。

現在の登録者数は二十一名であるが、今後も募集を行い教育活動の活性化の一助としたい。

また、本校では三年前から地域の「花貫清流の里づくりの会」とサケの稚魚の放流を行っている。昨年度からは幼稚園児や保育園児も参加し、十一月に卵のふ化から始め、育った稚魚を三月に花貫川に放流している。放流の際に県の水産試験場の職員も参加し、サケの成長について詳細な説明をいただいており、幼児や児童にとっては豊かな感性や郷土性をはぐくむよい機会となっている。

この事業の実践により新たな取組みが生まれ全職員で「萩っ子」を育成しようとする気運が高まっている。取り組む内容を明確にし更に教育活動の活性化を図り「萩っ子」育成に努めたい。

児童・保護者の願いかなえる
学校経営を目指して

鉾田・大和田小　神代　一栄

本校は、鉾田市の北西部に位置し、小美玉市・茨城町と隣接し、南を流れる巴川を挟んで近くには自衛隊百里基地と新設された茨城空港がある。児童数九十二名、特別支援学級を含め七学級の小規模校である。学区には商業施設や住宅団地等もなく、地域産業の多くは農業を主体としている。新たな住民はなく、多くの家庭は敷地内に三世代で暮らす家族が多い典型的な農村地区である。

本校の教育目標は、「進んで

学び、心豊かでたくましい児童の育成」である。

児童は、明るく素直でまじめである。反面、競争心が希薄で主体性に乏しく、発表力・表現力もやや劣っていた。平成二十一年度の茨城県教育研究会特別活動教育研究協議会の授業公開校となり、二年間にわたり「話合い」活動の研修を進めてきた中で、自分の思いや考えをはっきりと伝える力が着実に身に付いてきた。

現在、本校では次の三点を柱として、プロジェクトチームを中心に新たな取組みを通して様々な課題の解決に努めている。

一　学力向上のための工夫

分かる授業づくりのために、学び合いの場を積極的に取り入れ、知識・理解を確実にする学習過程の研修を進めている。具体的には、児童それぞれが自分の考えをノート等にまとめ、それらを伝える・練り合う活動を工夫している。自分の考えと友達の考えを比較・検討しながらよりよい考えを導き出す学習により、個々の学力を高めていければと考える。

また、学習計画表、自己評価表等の内容の工夫と活用を進める中で、本校児童の課題である文章で表現する力を伸ばすよう指導にあたっている。特にこれらは、字数を制限した表現の指導や教師それぞれの指導を振り返り、指導の在り方を見直す資料ともなっている。

二　マニフェストによる活性化

児童・保護者との連携を進める上で最も効果的なものとしてマニフェストを作成し活用している。目指すものを分かりやすく数値で示し、共に解決に向けて歩んでいくことはとても有効な手段であると考えた。

学習面では、①月例や単元テストの目指す平均点②家庭学習の時間や家庭学習帳の提出率③読書冊数や家読の達成率④発表力向上としての目標等について示した。心の面では、あいさつ・不登校対策の目標値を、健康・体力面では、体力テストのA＋Bの目標数値と本校の健康面での課題である「う歯治療率」を示した。

学期ごとに、教職員・児童・保護者それぞれからテスト結果や現状について調査やアンケート等を行い、集計・分析の結果を学校だより等で配信し、情報の共有化を図っている。具体的な数値による結果から児童・保護者には刺激となるとともに、教職員にとっても課題の把握と解決の方策を考えるきっかけとなっている。

三　幼小中交流の推進

小一プロブレム・中一ギャップの解消に向けて、幼小・小中連携を積極的に進めている。幼稚園とは教職員による情報交換会や授業参観、児童と園児との授業交流等を行っている。中学校とは、児童の中学校訪問や行事参観、また中学校教諭による出前授業をお願いし上級学校へのスムーズな移行に繋げることに努めている。

以上のような様々な取組みを継続してきて、着実に児童の学力・体力・表現力等の向上が見られるようになるとともに、今まで以上に保護者の理解と協力を得ることができるようになってきた。今後も児童のために何をすべきかを考えて、特色ある教育の推進にリーダーシップを発揮していきたい。

子どもを主役とした活力のある学校を目指して

かすみがうら・新治小　宇津野　英広

本校は、かすみがうら市の北部に位置し、国道六号線沿い常磐高速道路千代田石岡インターチェンジすぐ側という交通の便のよいところにあります。創立は、明治八年に開校し、百三十五年を迎える歴史と伝統のある学校です。

敷地面積は三万五千平方メートルと広く、初代校長先生が植えたとされる梅の木がまだ大切に残されています。また、毎年卒業生が卒業記念樹として桜の木を植えたと言われる桜の木がたくさんあります。さらにその周りに、九千六百平方メートルの学校林があり緑に囲まれた自然豊かな学校です。

児童は、体を使った活動が大好きで、特に運動が大好きです。その上とても仲がよく、兄弟のように一緒に活動したり遊んだりしています。また、あいさつがよくでき、朝のあいさつだけでなく昼のあいさつもとてもよくでき、来校者の方々からよく褒められます。

保護者は、代々本校卒業生であり「わたしの学校」という思いがあり、非常に協力的で授業参観や奉仕作業の参加だけではなく、日頃から鶏小屋の修繕や学校田の田起こし、フェンス沿いの草刈りなど積極的に行ってくれます。

子ども・保護者・地域の信頼を基盤に「子どもは地域の中で育つ」を学校経営の一つの柱とし、子どもを主役とした活力のある学校を目指して取り組んでいます。

一　学校林を活かした活動

保護者の協力で、学校林から

切り出したひのき材を使ったフィールドアスレチック施設があります。この施設を体育の時間の準備運動に取り入れたり、休み時間に楽しく遊んだりして体力の向上に役立てています。

また、自分たちで間伐した材木を細かく砕いて木片チップ状に敷き詰めた林間コースがあります。この林間コースを利用して持久走大会を行っています。

二　主体性を重視した活動

異学年の児童が遊びの中で思いやりの心を育てるため、「ふれあいタイム」（水曜日ロング昼休み）を使って縦割り班ごとに班長をリーダーとしてなかよく遊んだり、「なかよしクラブ」（木曜日昼休み）に登録して、上級生が下級生の面倒を見ながら一緒に遊んだりする時間を設けています。

また、委員会活動が盛んで、環境委員会では、始業時間前に玄関前の除草や掃き掃除を毎日行ったり、体育委員会では、雨の日の体育館使用を自分たちで計画し実施したり、飼育委員会では、たくさんいるウサギやニワトリに愛情を持って毎日世話をしています。

三　体験を重視した活動

地域の人材を活用した体験活動を多く取り入れた授業を行っています。例えば、六年生の社会科の歴史の授業では、華道、茶道、水墨画の専門家の先生を呼んで実際に専門的な指導を受けながら本物を体験することができました。

また、三年生の社会科の地域学習では、近くの神社へ行き、神主さんから神社のいわれや御神木についての話を聞き、興味深く地域を知ることができました。

さらに本年度は、表現力を高めるため、これらの学校行事や体験活動を実施した後にお礼の手紙を書いたり、日記や作文を書いたりすることに力を入れています。

地域とともに歩む花小
～地域の教育力を生かして～

常総・大花羽小　中川　和彦

平成二十年四月に「大花羽小学校」に異動した時、学校名がすてきだなと思い、右のようなスローガンを掲げた。

本校は明治二十二年十月一日に大輪・花島・羽生の三村合併で大花羽小学校ができ、昨年度創立百二十周年を迎えた歴史ある学校である。全校児童七十四名が昼間のきょうだいとして仲良く学んでいる。また、欠席ゼロの日が多く、「欠席ゼロの日百日」を目指している。

昨年度スローガンを膨らませ、「花小には夢がある」を作詞・作曲した。

大花羽小学校には
大きな夢がある
きれいな**花**がある
羽ばたく未来がある

一鬼怒の流れに　豊かな大地
ぼくらもきみも　進んで学ぶ
ぼくら昼間の　きょうだいだ
ともに楽しく　学ぼうよ
大花羽小には
とても大きな夢がある

大きな夢がある大花羽小学校
（二番・三番省略）

具体目標の一つに「歌声のある学校・学級」を掲げ、毎年、願いや思いを歌詞にこめて歌を作り、子どもたちに伝えている。

本校の特色は地域等の教育力を積極的に生かしていることだ。以下にいくつか紹介したい。

① 大花羽ふれあいスクール

毎週月曜日に「大花羽ふれあいスクール」が開催され、地域の十数名の方が指導に当たっている。今年度は五十九名（八十パーセント）の児童が参加している。活動内容は、宿題をした後、子どもたちの希望に添ったいろいろな活動をしている。

② 書道教室

夏休みと冬休みの計五日間「書道教室」を開き、地域の六名の講師の方に丁寧に教えていただいている。今回は全児童の約八割が参加し、一生懸命練習していた。

③ 親子ふれあい祭り

地域の七名の方を講師として、親子で紙鉄砲や水ロケット・絵手紙などを制作し、楽しい一日を過ごした。

④ 音楽の花束コンサート

市内の音楽家のグループ「音楽の花束」の方に来ていただき、オペラや合唱を鑑賞している。

⑤ 親子で星を見る会

毎年二回、守谷市の宇宙少年団の方に来ていただき、天体望遠鏡で月や木星・土星などを観察している。

⑥ 防犯ボランティア「花小みまもり隊」の活動

児童の登下校の安全、そして地域の方々との関係を深めるために昨年度末に防犯ボランティアを立ち上げた。三十六名の方が登録してくださり、職員と共に児童の登下校を見守っている。

他にも、学習ボランティアとして「外国語活動」や「本の読み聞かせ」、卒業生の石塚真一さん（漫画家・「岳」の作者）の講演会など、地域の方々が子どもたちの教育に積極的にかかわっている。

校長として、保護者・地域には学校だより「大花羽だより」やホームページ、職員には校長室通信「まごころ」を発行して、学校の内外に開かれた学校経営を進めてする。

小規模校の特色を十分に生かしながら、これからもリーダーシップを発揮して学校経営にあたりたい。

特集2　行財政・調査研究委員会の要望や取組み

教育行政に関する要望書提出と要望活動の改善

行財政委員長　佐藤　和彦

「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」のそれぞれの力をバランスよく子どもたちに身に付けさせ、一人一人が夢や希望を語れる場としての学校が今こそ必要であり、そのための教育環境の整備を「教育行政に関する要望書」としてまとめました。

多くの会議と県内全校長からのアンケート調査そして全小連や全日中の情報等を踏まえ、更に、諸先輩方の助言をもとに、八月三十日、県教委に要望をしました。

今年の要望の特色は次の点です。①要望内容を最優先事項・継続事項・提言事項の三つに分け要望したこと。②子どものより良い成長を共に願う学校と行政でありたいというスタンスで臨んだこと。

【最重点要望】（要望の概要）

新教育課程実施のための教育環境の充実（略）

一　一人一人の児童生徒の教育の充実を図るための教職員の人的措置について（最優先要望事項のみ）

(1)　三十五人学級の実現

(2)　小学校専科担当非常勤講師の配置教科の拡充及びその配置条件の緩和

(3)　十二学級以下の学校への加配措置

二　学校の組織の充実と活性化を図るための施策や教職員の人事について

(1)　新規採用者の増員と講師経験者の実務実績を加味した採用枠の拡大

(2)　小・中学校の欠員の解消

(3)　定期人事異動における校長の意見具申の尊重

(4)　免許教、男女比率、年齢構成等への配慮

三　現職教育の充実と教職員の待遇改善について

(1)　教育の業務の軽量化を図り子どもと向き合う時間を生み出すための改善

(2)　研修内容・悉皆事業軽減管理職手当てカット及び給料減額の解消

(3)　教職員の重要性・困難性に見合う給与の改善

(4)

四　退職者に対する処遇改善

五　市町村当局への助言（略）

【詳細は要望書参照】

なお、国の教員定数の改善計画に対する県の対応策は次のように示されました。

国の定数改善計画第一期（平成二十三から二十五）の三年間は現行の茨城方式を維持継続する。その間に新規採用教員数を計画的に増員し、全学年で三十五人以下学級が実施される第二期（平成二十六から二十八）及び小学校低学年で三十人以下学級となる第三期（平成二十九から三十）に適切に対応できるだけの体制を整える。その理由は《①指導体制の改善に取り組んでおりその結果が出てない時点で新たな体制に組み直すことは学校現場の混乱が予想される。②少なくとも国の第一期となる三年間は現行の茨城方式で進めることが適切である。》と示しています。

本多義務教育課長からは○教職員の人的措置は効果を確認しながら国の動向を注視し進めて行くこと○新規採用者については長期的ビジョンで計画を考えていくこと等の回答がありました。鈴木教育長からは○学力向上は、各学校が改善プランに取り組んだ成果であり感謝している。学びの広場が他学年への広がりを見せており今後もさらなる広がりを期待したい等の話をいただきました。意見交換では「業務の軽量化」「部活動の在り方」「欠員解消」「副校長制」等が話題となりました。

次年度に向け、要望活動の改善を次のように考えています。○校長会としての確かな経営ビジョンに基づき、関係機関との情報交換等を計画的に実施し要望内容の年次計画化と重点化を図る。○他の専門委員会とヨコの連携を図りより効果的な調査活動をする。

「学校評価」に関する調査研究（三年次）

調査研究委員長　篠原　光

調査研究委員会では、学校経営改善の視点を明確にしたり、行政への意見・要望等をまとめる際の基礎資料として活用したりすることを目的に、毎年県内公立小中学校長を対象にした悉皆調査を行っている。

本年度は、一昨年度・昨年度に続き、「学校評価」について質問紙を用いて調査した。

寄せられた回答は、前年度までの結果と比較しながら考察し、現状や課題としてまとめた。

要約すると、次の通りである。

一　自己評価について

○重点目標の内容

重点目標として取り上げた内容では、「確かな学力」96％、「豊かな心」90％、「健康・体力」76％、「開かれた学校づくり」40％の順である。この4項目は毎年その順位が同じであり、パーセンテージも同様である。

○中間評価の時期と結果の活用

七月～八月に実施している学校が93％を占める。中間評価を「施策等の見直しに役立てる」、又は「年度末の評価との比較に役立てる」と回答した学校が92％であった。

○自己評価資料の収集先と公表

前年度同様、ほとんどの学校で教職員以外に児童・生徒、保護者から評価資料を収集している。地域住民からの収集は15％（昨年度14％）と低く、今後の課題である。

自己評価結果の公表方法につ

課題

業務の軽量化への取組

学校長会副会長　金田　美佐雄
（行方・麻生小）

「おはようございます。」子どもたちの元気な挨拶で学校の一日が始まる。学校は子どもたちが安心して生活でき、学力の向上が保障される場所でなくてはならない。そのことが保護者が学校を信頼し、安心して子どもを通学させることに繋がる。

担任の仕事は多忙である。朝の出席確認から始まり、授業以外にも、業間や昼休みは子どもとの遊びや運動を行う。下校までの間、まとまった時間の確保は難しいため、保護者との連絡帳への記入は給食の時間に行うことになる。下校時は交通指導をしながら途中まで子どもを送る。放課後は会議や校内研修を行い、これらが無い日には教材研究や授業準備をする。生徒指導上の問題での保護者との対応は、両親とも仕事をしている家庭も多いため夜間になる。中学校の教員は、これらのほかに部活動の指導が加わる。

教師が子どもと向き合う時間を増加させるため、行方市校長会は業務の軽量化のための話し合いをもった。その内容のいくつかを挙げる。実効性のある事例として、パソコンの活用がある。報告文書や進路情報、行事の連絡に使用することで、迅速な情報交換ができるということである。通知票の作成に利用することで多数の教師からの意見を収集し易くなり、より客観的な評価にもなるとの考えも出た。

次に、職員会議の効率化である。協議と連絡を分けることや時間を五十分と制限する等の案が出された。行事の精選では、いくつかの行事を併合すること、二日で実施していたものを一日にすることや、持久走大会では、管理負担の少ないコースに変更することなどが出された。しかし、子どもの楽しみを減らすものであってはならないとの意見も出た。他には出張の見直し、作品募集への対応の仕方などであり小さな改善の積み重ねが必要なことを確認した。これらを進めていくには、学校の経営者として校長のマネジメント力の発揮が重要であることを共通理解とした。

業務の軽量化が児童生徒のよりよい学校生活や学力向上に結びつく取組みであることを忘れてはならない。

学校からの教育改革を推進し、「いばらきの未来を拓くたくましい人づくり」のため知恵を絞りながら地道な努力をしていきたい。

いては、「学校だより」や「学校評議員会」がいずれも90％以上である。「ホームページ」での公表が、17％、22％、26％、と三年連続ポイントを上げた。

二　学校関係者評価について

○実施回数と委員の構成

年一回実施が23パーセント、二回実施が44パーセントと例年とあまり変わらないが、三回実施は、20パーセント、27パーセント、31パーセント、と三年連続増加している。学校関係者評価が定着してきていることが伺える。

委員の構成は、学校評議員95パーセント、保護者（ＰＴＡ役員）75パーセント、地域住民30パーセントであった。学校教育と直接かかわる保護者と、地域に根ざした学校を目指す公立学校として、地域住民を委員に加える必要があると考える。

○評価結果の公表

評価結果の公表方法は、「学校だより」が84パーセント、「学校評議員会」が75パーセントと高かったが、自己評価結果の公表と比べるといずれも10ポイント以上低い。学校が説明責任を果たしていくためには、結果公表は欠かせない取組といえるだろう。

三　学校評価全般について

○学校評価の成果

昨年度の学校評価の成果として、88パーセントの学校が学校課題の明確化に、50パーセント以上の学校が保護者・地域住民との課題意識の共有や学校改善、開かれた学校づくりの推進に成果があったと答えている。また、提示した八つの項目全てで前年度以上のパーセンテージを示しており、学校評価が着実にその成果を上げつつあることが伺える。

ところで、この調査結果は各校に電子データでお送りしましたので、御活用いただければ幸いです

第六十回全国公立小・中学校女性校長会全国研究協議大会　茨城大会開催

大会実行委員長　島田　れい子
（水戸・千波小）

去る七月二十九・三十日（木・金）、水戸市を会場に、第六十回全国公立小・中学校女性校長会全国研究協議大会茨城大会を開催いたしました。併せて、結成六十周年記念式典を挙行いたしました。

開催にあたりましては、茨城県学校長会の皆様より温かな御理解と御支援をいただき、心より感謝申し上げます。

茨城大会実行委員会は、茨城県学校長会の会員でもあります九十九名の女性校長により組織し、大会運営にあたりました。

通常の大会に加えて、六十周年記念事業もあり、緊張と不安の中で当日を迎えました。

第一日目には、秋篠宮妃殿下に御来臨を賜り、盛大かつ厳粛な六十周年記念式典を挙行することができました。

式典に続いて「記念演奏～いばらき　心のハーモニー～」と題しまして、水戸市立笠原小金管バンド部の金管アンサンブル、磯節道場による民謡や踊り、牛久市立牛久第一中混声合唱団の演奏等にのせて、本県の教育や文化などを映像で紹介しました。子どもたちの演奏に感動したとの声が、数多く寄せられ、茨城のすばらしさをお伝えすることができたのではないかと思っております。

第二日目には、六分散会に分かれて、熱気あふれる研究協議が繰り広げられました。全国には約四千名の会員がおりますが、今大会には七百名に及ぶ会員が参集しました。それぞれが本音で語り合い、明日からの活力と課題解決の糸口を得るなど、充実したひとときとなりました。

私たちは、この大会で学んだことを生かしながら、今後も、校長としての指導力や経営力について共に学び合い、深め合い、高め合い、研鑽に努めてまいりたいと存じます。

特集3 先輩と語る会

八月二日　水戸三の丸ホテル

本年度は、二十名の先輩校長先生方にご出席いただき、「最近の教育諸問題とこれからの教育の方向性」を中心に話し合いをしていただきました。

記号　◇　先輩校長
　　◆　現職校長

人材育成について

◇　子どもたちは昔も今も素直で明るく、いつの時代も純粋である。

　その子どもとかかわる一人一人の教員の資質の向上が大切である。初任者研修等の様々な研修があるが、学校現場での指導はとても貴重であり教師としての本当の力がつく場所である。

　現場で教師の基礎基本をしっかり教えていくことが必要である。

◇　教育問題が山積しているなか、校長は教員を、校長会は校長を、そして学校は後輩をしっかり育てなければならない。

◇　学力・学校力向上は、健全な教職員があってこそ解決する。しかし、新採がすぐにやめてしまったり、中堅が校長と信頼関係を築けず力を発揮できなかったりしている。

　校長はプロモーターとしての意識をもってその対応をしなければいけない。

◇　子ども一人一人を大事にしなければならない。そのためには、一人一人どのように生活しているのか、よく見つめることが大切である。

　また、職員については授業を見てまわり、教師としての指導の在り方を教えてあげることが大事である。

◆　我々は人材育成をよく口にするが、自分自身はどうなのか、校長の資質向上の施策が大きな課題である。

　学校長会として何ができるかを考えたときに、県および市町村教育委員会と連携してやらなければいけない。学校長会の組織としては、各郡市代表の集まる企画委員会等でこの課題を共有化し、各市町村で話し合いを進めていくことが今後必要になってくるであろう。

◇　今年度も百数十名の新しい校長が生まれたが、教職員としては専門職であっても、経営者としてはそうではない場合もある。学校長会という組織として経営者はどうするのか教えていってほしい。

　校長は学校で一人でいるときが多い。校長同士が話し合い、課題解決していってもらいたい。

◇　校長は二・三年で代わる。前任者のよさと問題点があるわけなので、それをどう改善できるかということが学校経営である。

　今こそ教育現場は原点に戻るべきである。子どもも職員も十人十色。一人一人違うから指導が難しい。その難しさを乗り越えさせるのが校長である。校長が力をつければ職員もよくなるし、学校は引き締まってくる。

　では、校長が力をつけるにはどうすればいいのか。各市町村校長会の問題を話し合うことも一案である。

学力問題

◇　校長会のウェブページができることは誠に喜ばしい。また、全国学力調査において、茨城県が平均並みになったことは、現場の先生方がたいへん努力した結果ではないか。

　しかし、この調査が過度な競争にならないか心配である。

◇　本県は全国に誇れる学力診断テストを、ずっと実施してきた。ただ、あまりに結果に終始して、正答率を上げようという所だけに目がいって弊害も出てしまったこともある。全国学力調査では点数に終始することなく、その結果をもとに子どもに生きる力が育つよう、県や学校が具体的な施策を考えていかなければいけない。

　また、環境即教育力なので、楽しく学習ができる環境を、どのように作ってやるかが大切である。

◇　学力問題を総合してみると家庭の教育力の低下・地域の教育力の低下も原因の一つと考えられる。改正教育基本法十三条に「学校・家庭及び地域住民その他の関係者は、教育における

それぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」とあり、学校がすべてをやるのではなく、それぞれが子どもの教育に携わることが大事である。

◇　文部科学省から全国の公立学校の耐震調査結果が発表されたが、茨城県は全国平均を下回っている。不安の中で学習するのだから学力が低下するのも当たり前。耐震工事は命にかかわることなので、最優先にしてもらいたい。

◆　少子化・小規模化に伴う学校の統廃合が検討され、学校の耐震化が進まないところがある。校長としてどんな学校がいいのか意見を求められた。第一は毎日学校へ行きたい、友達と元気に遊びたいと思える学校づくり。そのために、物的・人的環境が整った学校ならば学校本来の仕事ができるのではないか。

教育改革

◇　文部科学省では三十年ぶりに四十人学級の見直し等をしている。県内市町村でも三十人学級や小中一貫教育・小学校高学年での教科担任制等の計画が検討されている。

◇　小学校四年生は夏休みに学びの広場サポートプランを実施して、学力向上を図っている。しかし、中学年の担任を決めると

きに、安易に新採や講師を配置していないか。また、小中学校の断層をどう埋めるか工夫が必要である。校長として目配り気配りをしていただきたい。

◇　学校の諸問題にただ対応するだけでは対処教育になってしまう。子どもが夢と希望をもてるような教育をしなければならない。

教科・道徳・特活やＰＴＡ集会等で必ず「夢と希望」をもたせるような視点を提示し、全校挙げて実践すれば、学校への信頼や学力向上につながっていく。

◆　学校長会として地域の現状に合わせて何ができるか、どんな取り組みができるか話し合いを進めている。「学校は校長で変わる、校長が変わると学校が変わる、学校が変わると職員が変わる、職員が変わると子どもが変わる」と言われる。子どもたちが生き生きと生活できる、そして、地域から信頼される学校づくりを目指して進めていきたい。

◇　学校の役割について、今一度考える必要がある。社会の期待に応えるためには、教師一人一人の力をより高めていかなければいけない。また、教育界は様々な言葉がその時その時の時代に出てくるが、言葉遊びに終わってしまい徹底されない。各学校で今何を徹底するかを、これから考えていかなければいけない。

地域との連携と心の教育について

◇　各地域では少子化に伴い学校に通う子どもが少なくなっており、学校だより等が回覧されても、関心があるのは保護者だけである。それより、学校関係者が一度でも地域の自治会長等にあいさつに行き、学校の話などしてくると、地域の方々も学校に関心を向け協力してくれる。

◆　保護者から様々な意見があるが、校長が情報をしっかり正確にとらえないと、まちがった対応をしてしまう。

また、人を育てる校長はもっとしっかりしなければならない。県学校長会→各郡市→各校長という流れの中で、それぞれどのように伝達したらよいか考えていきたい。

◇　学校経営にあたっては、学校・家庭・地域が十分に連携して取り組んでいかなければいけない。また、最近の子どもは自分に自信がもてないというか自分自身に対する評価が低くなっている。次世代を担うために、たくましさとコミュニケーション能力の育成が大切である。

◇　子どもの基礎・基本は言われるが、教師の基礎・基本についても考える必要がある。「板書」一つにしても、方法や内容についてきちんと理解していなければいけない。ばかばかしいと思った仕事でもきちんと正確にやらなければいけない。「有限を極めて無限に迫る。」有限は極めなければならない。

また、今は原体験欠乏時代であり、生や死を通して喜びや悲しみを知る機会が少ない。本当の体験をしていないので凶悪な犯罪が発生しているのではないか。

◇　今の学校では、心の教育が十分でない。子どもたちが互いに挨拶したり、助け合ったりする気持ちを育てたい。外部からの評価も大切だが、まず教師が自分のした仕事をしっかり評価すべきである。最近、講師の数が多くなり、子どもと本気で向き合うことができなくなっているのではないか。採用者を増やさなくてはいけない。

◆　今の教師は本当に面白くて学校へ行っているのか、気概をもって学校に行っているのか。教師の超過勤務、各学校にいるモンスターペアレンツ等、十数年前には経験しなかったようなことが次々起こっている。職員に「問題が起こるのは当たり前。起こったら隠すな。すぐに話してくれ。話した時点で管理職の責任だから心配するな。」と言っている。

非常に厳しい状況だけれど、先生になってよかった思えるよう、教育を楽しむことを忘れず、先生方が心を一つにしてやっていってほしい。子どもたちの人間関係が非常に希薄で、コミュニケーション能力もなくなっている。集団の中でのきまりや躾は家庭では教育できない。学校がやらずしてどこがやるのかという気概をもって実践しなければ、これからの日本は変わっていかない。

◇　道徳教育の要はやはり道徳の時間である。この時間をいい加減にやっていたのでは本当の心の教育にはならない。道徳の時間は読み物を読んだり、ビデオを見たりする時間ではない。

その方法として第一に挙げるのは、討議やディスカッションである。特に携帯電話等の普及で中高生があまりしゃべらなくなったこともあるので、子ども同士でディスカッションや討議をして、先生も交えて問答するという時間にしたい。

また、これからの学校経営は、各校長が様々な創意工夫と広く深い研修をしていくことが大切である。

出席者（敬称略）

先輩校長（役員）

・寺門　光輝　・細金　貞實
・横島　主計　・中川　實
・髙塚　義夫　・下河　哲雄
・塙　茂樹　・田崎　光紀
・大久保邦男　・外山　彬
・中村　仁　・中井川正次
・永山　宏昭　・田村　進
・檜山俊六郎　・土門　能夫
・石津　博康　・鈴木　一司
・櫻井　昇　・佐藤　和夫

学校長会

・長澤　勤　・金田美佐雄
・砂川　洋一　・和泉田　寛
・蛭田　隆久　・大滝　茂

広報委員会　五名
事務局　三名

大変貴重なご意見をいただき誠にありがとうございました。今後の県学校長会の運営及び学校経営に生かしていきたいと存じます

経営研究

創意を生かした特色ある教育課程

一人一人が達成感を味わうことのできる学校づくり

那珂・五台小
後藤　哲也

一　本年度の努力点

標題の学校経営の重点を踏まえ、本校では五点の中期目標を設定した。そして昨年度の学校評価結果から次の五点が本年度の努力点としてまとめられた。

① 集団生活の規律指導の徹底
② 学び合いを深める授業研究
③ 学習・生活両面における個別指導の充実
④ 健康増進・体力向上に励む児童の育成
⑤ 職員間、対保護者・地域等との報・連・相・確の徹底

二　教育課程上の具体策

以上の努力点を知・徳・体・連携の四グループ目標に置き換え、以下の具体策を講じている。

知のグループ

・知的好奇心を喚起する課題提示や発問の工夫・改善
・系統的な話し合い活動のモデル作成と授業への活用
・TTや少人数による下位児童への個別指導の徹底
・児童への発展教材の準備
・家庭学習の手引きの配布と活用による家庭との連携
・「みんなに進めたい一冊の本」推進目標・五〇冊達成六五％

徳のグループ

・「なかっこ宣言」斉唱の徹底
・道徳の時間の充実とあいさつ指導の徹底

学び合いを深める職員での研究協議

・SSTの研修と積極的導入
・児童教育相談の毎学期実施
・一人一役の集団的体験活動の計画・実践と振り返り
・清掃作業等勤労教育の充実

体のグループ

・運動量の確保と個人カルテを活用した体育授業の実践
・体育的行事において、児童に目標達成意識をもたせる。
・体力テスト（A＋B）六〇％
・養護教諭と担任とのTTによる保健指導の充実
・朝食摂取率一〇〇％実現

連携グループ

・学校生活の様子を伝える学年・学校だよりの配布
・地域の教育資源の活用（芋畑・水農・GT・根本正等）
・親師会行事への積極的参加
・金管バンドの地域貢献

児童にとって夢のある学校づくりのために

行方・大生原小
青木　利宏

一　本校の特色と教育資源

本校は児童数六十七名という小規模校であり、校庭から北浦の湖水を眺め、冬には白鳥も飛来する豊かな自然に恵まれた素晴らしい環境に囲まれている。

通常学級六、特別支援学級二の八学級で、どの学級も少人数でのきめ細かな指導を展開できるという利点がある。

また、学区内には大生原古墳群、大学の研究施設、浄水場等児童の体験的な活動や学習に活用できる教育資源も数多く存在している。

二　学力の向上に向けて

算数科を中心とした授業研究では、一人一人の児童に視点をあてた授業に取り組んでいる。県学力診断テストやCDTテスト、単元ごとのレディネステストによって児童のつまずきを予測し、具体的な手だてを準備しておくことで、個に応じた指導に役立てている。授業研究に際しては、学習指導案の協同立案教材の協同作成により、全教員が主体的にかかわることができるようにしている。

今年度は、学力向上対策として、一・二校時を五〇分授業とし、国語と算数を位置付けることで、学習した内容を確実に定着させるための指導時間の確保に取り組んでいる。

三　緑の少年団活動を柱とした豊かな心の育成

児童主体の行事や縦割り活動を「大生原小緑の少年団」の活動として位置付け、児童自らの手による憲章づくりに始まり、茶摘み体験や白鳥の里での自然と親しむ会等の自然体験、保育園や老人ホームを訪問しての福祉体験、分団単位での花壇づくりやレクリエーション活動などを通して、互いに協力しながら自らの思いを表現する力、人や自然を大切にしようとする心を育てている。

これらの教育活動を柱として、児童一人一人にとって、夢のある楽しい学校づくりを推進している。

思いや考えを伝え合う力を育てる指導の在り方を求めて

龍ケ崎・久保台小
根本　勇一

本校は、龍ケ崎市の東部ニュータウン地区に位置する、開校十五年目を迎えた学校である。

平成二十年度より、市教育研究会の指定を受け、国語科において「思いや考えを伝え合う力を育てる指導の在り方」の研究を進めてきた。

本校児童の実態として、「学習の場や日常生活の場において、自分の考えをまとめたり、相手や場に応じて分かりやすく自分の思いや考えを伝えることが苦手」という表現力の不足が課題となっていた。

そこで、児童が学んだことを生かすことができる「交流」の場を意図的に国語の時間に位置づけることで、豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重しながら自分の考えをより深めていくことができると考え研究実践を進めてきた。

目指す児童像を

低学年

読み取ったことをもとに自分の考えをもち、自分の体験と結び付けていろいろな方法で思いや考えをまとめ発表し合うことができる。

中学年

読み取ったことを相手の考えを受け止めながら発表し合い、一人一人の感じ方に違いがあることに気付きながら、相手の考えと比べることができる。

高学年

読み取ったことをもとに自分の考えを目的や意図に応じて話し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

とらえた。

また、「伝え合う力」を

①自分の思いや考えをもつ力

②自分の言葉で思いや考えを分かりやすく伝える力

③相手の考えを受け止め相互に高め合う力

とらえ、授業の中に意図的に設けた「交流」の時間に、相互に考えや意見、感想等を述べ合うことで、伝え合う力を育て学びの質の向上を目指してきた。

この研究を通して、児童の成長を促すだけではなく、児童の主体的な学びを保障する授業改善の視点から教師の意識の啓発も図ることができた。

今後とも、児童の「伝え合う力」が日常生活にも生かされるよう研究を深めていきたい。

活力ある学校を目指して

桜川・樺穂小
石塚　貴志

子どもが動き、教師が動き、保護者が動き、地域が動く。魅力ある学校には「活力」がある。活力ある学校を目指して本校では次のように取り組んでいる。

一　異年齢集団による体験活動

毎週火曜日の昼休みに「ふれあいタイム」を設定している。この時間には、各種集会、異年齢集団による活動、愛校作業などを行っている。特に異年齢集団による活動は、現在失われつつある縦のつながりの強化と、リーダーの育成をねらいとして重要視している。

「ポプラ班」と名付けた一グループ八～九名の異年齢集団は、全校で二十四あり、次のような活動を行っている。

(1) 集会活動…一年生の歓迎会やハイキングなど

(2) 班での給食…各学期一回

(3) クリーン活動…学校近辺および校内の清掃

(4) 班での遊び…各学期二回中遊び・外遊び・体育館遊びをそれぞれ二回ずつ

(5) 運動会での班対抗演技

運営の中心は特別活動部である。二つの班に一人の割合で担当教師が付くが、ポプラ班活動の計画立案は、原則的に各班の班長会議によって行われる。リーダーを中心とした子どもの自主的活動は活力ある学校への第一歩である。

二　地域人材の活用

桜川中学校地区が「学校支援地域本部事業」の指定となり、今年度は二年目になる。桜川中学校・谷貝小学校とともに、地域全体で学校教育をサポートしていただいている。地域に二名のコーディネーターが配置されており、学習サポーターやゲストティーチャーの依頼を一手に引き受け、人材確保にあたってくれている。

本校ではできるだけたくさんの方に学校に入っていただきたいと考え、多くの募集を行った。現在までに次のような協力をいただいている。

(1) 学習支援…まる付け・絵画・工作・習字・調理・ミシン・珠算・ダンス

(2) 図書館整理…月一回

(3) 庭木剪定…二名の方に年間を通してやっていただいている

(4) 環境整備…掲示板等作成

(5) 除草作業…ＰＴＡ奉仕作業の折地域の方が協力

地域の教育力が学校の活力となっている。

今後も、たくさんの地域の方々が来校し、協力いただける学校でありたい。

市町村教育委員会と学校長会

北茨城市

市町村教育委員会と学校長会との連携・リーダーシップ

北茨城・精華小
鈴木　芳雄

北茨城市校長会は、小学校十二校、中学校五校の計十七校で構成されている。

校長会では、月の定例校長会を始め、その他、必要に応じて研修をもち、教育課題解決のために話し合い、各学校の取組みなどの情報交換を行っている。

地教行法の改正に伴い、教育委員会のもつ責任や権限は大きくなっている。このようなことを踏まえ、校長会と市教委が、連携・協力体制を構築し、課題解決のためにリーダーシップを発揮していかなければならない。

本市教育委員会の構成は、教育総務課、学校教育課、生涯学習課から成り、いずれの課も学校教育と密接な関係をもっている。

ここで、本市校長会と教育委員会との連携について、いくつか紹介をする。

その一つ、定例校長会であるが、市教委から教育長と学校教育課長が出席し、課長からは、学校運営への意見や助言・指導を受けたり、教育課題の提案などに対する協議などが行われる。また、時には、教育総務課や生涯学習課からの提案などもあり、幅広く研修が行われている。

二つめは、教育委員との研修会である。本市の教育委員会は教育長を含め、五名の委員で構成されているが、日頃、教育に関する意見の交換や話し合いの機会をもつことは少ない。そこで、校長会では、お互いに意見を交換し合う研修の機会をもっている。ちなみに今年度は、「学力の向上への取組み」というテーマで話し合いがもたれ、現状とその課題解決への方策等について、有意義な話し合いをもつことができた。

また、「市長との教育懇談会」も行われ、市の学校教育に対する思いや願いを受け、学校教育の推進に反映させている。

その他、教育予算の要望や危機管理への対応、学力向上の問題など、多岐にわたる教育課題に対し、市教委からの指示を待つだけでなく、校長会自らが、主体的に考え、全校長の共通理解のもとに取り組むとともに、市教委と連携をより密にし、リーダーシップを発揮していくことが校長会に課せられた大きな役割の一つでもある。

鹿島地区

教育委員会との連携について

鉾田・鉾田小
大津　博史

本市校長会は小学校二十校、中学校四校、計二十四校で組織されている。現在、校長会代表も加わり鉾田市公立学校施設適正配置計画策定委員会において小学校の適正規模・適正配置計画の検討が行われている。

このような状況の中、本市校長会は毎月一回、定例の校長会を開催し、その中で、市教育委員会教育長、参事兼指導課長からそれぞれの立場で指導・助言をいただいている。特に、教育長からは市の教育課題に向けての取組み、学校経営、教職員の資質の向上、人事など広範囲で指導・助言を受けている。

平成十八年度に鉾田市教育目標「夢と希望をもち、未来を拓く心豊かな人づくり」を制定し本市教育の方向性を教職員はもとより、一般市民にも公開している。教育目標実現に向け、市教育委員会との連携のもと、代表的な事業について述べてみたい。

昨年度より校長会、教頭会、教務主任会との共催で学校管理運営研修会を実施している。鉾田市教育目標の実現を目指し、校長・教頭・教務主任が一堂に会して学び合いを行っている。さらに、市教育委員会の指導・助言をいただき学校管理運営の力量を高め合う研修の機会としている。本年度は校長会、教頭会、教務主任会より各代表が全体会で「学力向上に向けた取組」について発表を行い、分散会でさらに研修を深めることができた。各小中学校においては、学力向上に向けた取組みの成果が上がりつつある。

本年度も数多くの臨時的任用職員が市内小中学校に勤務している。市教育委員会と校長会が連携し、臨時的任用職員に対して、児童生徒へのかかわり方、校務を含めた教師としての基礎的指導力の向上に向けた研修会を実施している。指導者は市教育委員会指導主事、校長会・教頭会の代表者が担当し、指導・助言を行っている。

不登校児童生徒の解消に向け各小中学校とも校長を先頭に取り組んでいるところであるが、生徒指導研究部と連携を図り、不登校・虐待・課題のある家庭への対応について生徒指導研修会を実施している。各中学校区ごとに研究協議を行い、本年度は助言者に鉾田市派遣のスクールカウンセラーを招き、研修を実施した。小中連携の在り方、チーム援助の体制や取組みについて情報交換を行うことができた。

市教育委員会と校長会が密接に連携を深め、子どもたちの教育、本市教育の活性化、今日的教育課題解決に向けてさらに取り組んでいきたい。

特別寄稿

地方教育行政に携って

前鹿嶋市教育委員会教育長
青柳　誠司

平成十年十二月鹿嶋市の教育長に就任、以来三期約十二年、この拙稿が皆さんの手元に届く頃に私は教育長の職を退任していると思います。

さて、学校教育での実践経験も極めて浅く、ましてや教育に対する理論的裏付けすら持たない私が、学校長会広報の紙上で尤もらしいことなど述べられないので、十二年間教育行政に携わった中で、市独自の教育施策で実施して良かったと評価できるものを取り上げてその責めを終えたいと思います。

先ずはじめに、小学校への英語活動の導入です。市は平成十六年策定の教育基本計画に基づき、PLSのレシピ方式を独自に採用、市内のNPO法人との連携のもと、NLTなる外国語指導助手を各小学校に配置、低学年二十時間、中・高学年三十五時間を平成十八年「教育特区」その後「教育課程特例校」の認定を受け、英語によるコミュニケーション能力の育成と異文化理解を目的に授業展開、今年五年目に入りました。先生方の負担感、児童の英語嫌い等の不安を一掃し現在特に低学年の児童にネイティブなコミュニケーション能力の進歩が顕著な状況です。新指導要領での次年度からの高学年への導入も不安なくスタートできると確信しているところです。

次に、小学校の学校図書館整備事業です。近年子どもたちの読書離れが進んでいることはご承知の通りです。そこで、読書活動の充実推進を基本計画の中に位置付け、「学力の向上と豊かな心の育成」との目標を掲げながら進めています。

具体的には十二校全小学校の学校図書館を整備、専任の図書館司書を配置します。一度に全て実現することは財源的にも無理があり、四年目の今年度中に六校が完了、残る六校についてもできる限り早期に整備する考えです。児童の読書活動が活発になり、目標に向けて期待以上の効果を上げているとの報告を受けているところです。

中学生の海外派遣交流事業、市費採用教諭を配置しての小学校低学年への一クラス三十人の少人数学級導入については、紙面の都合上省略いたします。

結びに、茨城県学校長会のますますの充実発展をご祈念申し上げペンを置きます。

学校図書館リニューアルオープン

読んでみませんか

「話す」「書く」「聞く」能力が仕事を変える！伝える力

著　書　池上　彰
発行所　PHP研究所
常総・玉小　秋葉　道夫

教員の仕事として、子ども、保護者・地域住民そして同僚教師とコミュニケーションをとることは重要なことであり、この著書のタイトルでもある「伝える力」の必要性を痛感しています。

著者は、NHKの「週刊こどもニュース」という番組でお父さん役を務め、その後NHKを退社し、現在はフリーのジャーナリストとして活躍されている方です。毎日のようにテレビに出演され、ベストセラーとなっている著書も多くあり、ご存知の方も多いのではないでしょうか。私も何冊か読んでみましたが、複雑な現代社会の様子を分かりやすく解説してあり、面白く読ませていただきました。

本著は、ビジネスパーソン向けに書かれたものですが、私たち教員にも参考になる内容が豊富に含まれています。

「週刊こどもニュース」という番組の作成では、大人向けに伝えたニュース原稿を子ども向けに書き直します。子どもたちに「ダメ出し」されます。子どもたちが分かるまで書き直すのだそうです。このように子どもたちに理解しやすいような番組を作成していく過程は、私たちが授業を計画する時や他者とコミュニケーションをとる時に心がけることと共通することがたくさんあるようにに感じました。

「何かを調べる時には、『学ぼう』『知ろう』という姿勢にとどまらずに、全く知らない人に説明するにはどうしたらよいかということまで意識すると、理解が格段に深まります。」「『伝える力』を高めるには、自分が深く理解することが必要である。」という言葉にも筆者ならではの説得力があります。

私は、校長という立場で全校集会等で話す機会が多くありますが、子どもたちはどれだけ理解してくれているのでしょうか。職員会議での話がどれだけ職員の心に達しているのでしょうか。時々不安になります。

この著書で紹介されている内容を参考にして、自らの「伝える力」を高めていきたいと考えています。

ひばり

「息　子」
桜川市立岩瀬東中　植木　真智子

「本当は嬉しいクロとの散歩」

大子・大子西中
石井　久雄

「ワンワン　ワンワン」

やっと夜が明けて薄明るくなる時刻午前四時三十分に深い眠りから否応なしに起こされる。

「ご主人様、朝です。散歩に行く時間ですよ。」

夏休み早々に仏心を出して、夕方散歩できなかったので、可哀想に思い、朝に散歩してしまったのが運の尽きだった。それ以来決まってこの時刻に鳴いて私を起こし、朝の散歩に行かせる我が家の愛犬クロである。柴犬の雑種で当年十四歳。体は黒いが顔と足は白い。まむしに二回もかじられた経験をもつ。

ほとんどつながれて自由のきかない身であるクロの喜びは食事と散歩である。土日や祝日の夕方にまだ幼かった二人の息子と歌を歌いながらクロと親の今は亡きチロの二匹を一番星を待ちながら散歩した頃が懐かしい。今年の夏休みはこの朝の散歩と夕方の散歩もする羽目になってしまった。朝夕に五㎞の道のりなので一日に十㎞歩くことになる。家に帰ってくると必ず水を飲む。朝はその後に顔をブルンと洗ってやる。私の健康維持には大変よい運動である。

私は朝が早いので、夜寝るのも早い。明日また起こされるのがつらいような、嬉しいような気持ちですぐ眠りに落ちる。

お昼はモーツァルト

水戸市・見川中
高野　守

お昼の放送が気になった。給食の時間になると校内に今流行りの音楽がにぎやかに響き渡るのだ。もちろん生徒も負けないぐらいにぎやかになる。

放送担当の先生に、「少し静かな音楽にしたら。」と言ったら、「生徒が自主的選曲していますので。」と言われてしまった。

それならば私もリクエストすることにした。

「何にしよう?給食食べながら私の好きなブルースでは、食器でリズムを刻んでしまいそうだし。」

「そう言えば、モーツァルトの曲はココロを和やかにすると書かれていた。よし、モーツァルトだ。」

モーツァルトのCDは、持っていないので、図書館から借りてMDを作成した。それから、週二回せっせとMDを放送担当に手渡した。

毎年お正月には牧場を営んでいる叔父さんの家へ年始あいさつに行く。

帰りがけに「叔父さんはいないの?」「牛に餌をやっているよ。」

挨拶をしてから帰ろうと少し離れた牛舎へ向かった。牛舎に近づくにつれて聞き覚えのあるメロディー。

「もう（牛）ツァルトだ。」

牛舎に入ると牛たちが和やかに干し草を食べていた。よだれを垂らしながら。

近頃、生徒が和やかな顔で給食を食べているような気がする。

BGMは、もちろんモーツァルト。

教えること

北茨城・平潟小
神永　寧子

夏頃から「青少年のための科学の祭典北茨城大会」の準備が本格化してくる。

この北茨城大会は、今年で五回目を数え、地域の協力もあり、子どもたちに少しずつ浸透してきている。県内いくつかの場所で同じような大会はあるが、本市の特徴は、出展ブースの約半数で市内小中学校の教員が講師として子どもたちと実験をすることであろう。講師は理科以外に体育、英語、社会の専門をもつ教員もいて、専門を超えて毎年違った内容を考えて子どもたちを楽しませてくれる。

参加する子どもは、保護者と共に実験をしたり、昼食持参で一人で会場をまわり一日中遊んでいたりして毎回千名以上の入場者でにぎわう。

私は、子どもと一緒に実験をする教員の姿に「齋藤孝の教える力」（宝島社）に書かれていることをいつも思い出す。そこには「教える立場に向いている人とは第一に元気。元気は人を惹きつける。第二に知的好奇心。『すごい発見だろう!おもしろいだろう!』と伝えられること。第三に教育力。教えたいという心があること。」と述べられている。

今、このような教員と共に、十一月二十八日北茨城大会に向けて計画を進めている。

八溝山

行方・太田小
薄井　則夫

昨年の宿泊学習でのことです。車中でのクイズ問題で「茨城県で一番高い山は」子どもたちの多くは、「筑波山」と答えていました。「正解は、八溝山です」子どもたちの反応は「え～」でした。私は、なるほどと思いながら聞いていましたが、私自身、富士山に登ったことはあっても、茨城県で一番高い

山に登ったことがないなあと思い、無性に八溝山に登ってみたくなりました。

しばらくして、その機会がありました。といっても、麓の駐車場からどのくらいの時間がかかるのかを調べようと思い、車で立ち寄っただけでした。ところが、頂上まで車で行くことができたことに私は驚きました。展望台からの眺めは最高でしたが、登頂したという達成感は、もちろん得られませんでした。

「百聞は一見にしかず、されど百聞・百見は一験にしかず」松下幸之助さんもこんなことを言ったそうですが、知っているようで知らないことが多いことや体験することの大切さを改めて感じました。

強く　やさしく　たくましく

石岡・八郷南中　市川　均

修学旅行では、生きる力や人間力を高めるために、豊かな経験をさせたいという思いから、課題解決学習を取り入れています。ですから、出発までの何十日間は、生徒も教師も事前の調査やコースのシュミレーションなど頑張っていました。生徒たちの多くは、奈良・京都に行くのは初めてであるし、行ったことがあっても自分で移動することはなかったであろうし、不安と楽しみの中での事前学習でした。また当日は、道に迷ったときなど、自己決定するときの不安とうまくいったときの喜びをたくさん体験したのだろうなと想像し、成長を願いました。

帰りの常磐線の中でこんなことがありました。みんな疲れていて、爆睡したいところだったでしょうが、私の隣の二人の女の子が突然ジャンケンを始め、負けた方が立ち上がって、目の前に立っていたご婦人に席を譲ろうとしたのです。かなり恥ずかしそうでしたが、その時の彼女たちの温かさ、さわやかさに、そのご婦人だけでなく、私まで好感を覚えました。あれだけ疲れているのに、あっぱれな行動でした。おそらく奈良や京都でも、いろいろなグループがこんな体験をしてきたのだろうなと思わず笑みがこぼれました。

電話

龍ケ崎・龍ケ崎小　菊田　靖久

「おーい、今何やってる？」真夏の夜、大学時代に苦楽をともにした、所謂、同じ釜の飯を食った仲間からの電話であった。

私は所用があり、参加できなかったが、避暑地でのゴルフを楽しんだ様子が次々に語られてくる。そして、代わる代わるに仲間が電話口に出てくる。

「ゴルフより大事なものがあるのか」「俺のうまいところを見せてやれたのに」「残念だ、こっちにはうまい酒もたくさんあるのに」

とにかく、勝手なこと、たわいもないことを捲し立てるように話してくる。

また、Aはどうした、Bはこうした、などと参加していない仲間の情報もくれる。彼らは、私以外にも、他の仲間にたくさん電話をかけているのである。

電話代もままならないだろうな、と心配しつつ、ふと、三十数年前の時代に戻っている自分に気がついた。そして、元気とエネルギーをもらっている自分にも気がついた。

理屈や立場抜きでいろいろな話ができる昔の仲間のありがたさを感じる。

電話を受けることも楽しいが、仲間と集まり、電話をかける機会も心待ちにしたい。

巣立ちの時

結城市・城西小　中野　美紀恵

先日、日光東照宮での結婚式に臨んできました。長男が全て段取り、両親と叔父叔母だけに連絡して行ったものです。楽師による雅楽の音が響き渡る祈祷殿で、宮司や巫女の柔らかで美しい所作の流れの中に、若い二人の誓いの言葉が組み込まれている厳かな式でした。

私たちが共働きだったことから、息子は祖父母にかわいがられて育ちました。祖父母が育てたと言っても過言ではないくらい、祖父母の愛情をたっぷり受けて育ちました。そのせいか、幼い頃から穏やかで優しい子でした。その息子が、この日はすっかりたくましく見え、感慨深いものがありました。

しかし、誰よりもこの日を待っていたその祖父母は、今年の一月と六月に続けて逝ってしまいました。「お父さんお母さんと同じくらい仲のいい夫婦になれそうですよ。ここまで育てていただきありがとうございました。」持参した二人の写真にそう報告しました。

記念品には「人の一生は重荷を負て遠き道を行くが如し、急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし、心に望おこらば困窮したる時を思い出すべし…」と家康公の遺訓が記されていました。これからの私たち老夫婦こそ、これを旨として生きようと心した一日でもありました。

教え子たちに感謝

猿島郡・静小　近納　代幸

今年はとても暑い夏休みであったが、そんな中教え子の同窓会に招待された。大和中学校で教えた生徒たちで、二十四年ぶりの再会である。同窓会の前日、卒業アルバムを見ながら当時を思い出し、再会できることがとても楽しみになってきた。

よく教育の成果は、十年後・二十年後と言われるが、さすがに三十代後半の教え子はしっかりしていた。開会のあいさつを聞いているだけでも、その成長が感じられた。それぞれ様々な職業に就き、社会の中で活躍している教え子との一時はとても楽しい時間であった。一人一人と話をしている内に中学生時代の様子が浮かんでくる。その差が何とも言えなかった。

担任をしている頃は将来大丈夫かなと思われた生徒が、社会の中をここまで泳いできて立派になった姿を見ると、本当にうれしかった。みんなのこれまでのがんばりに心から拍手を送ると同時に、自分の教員生活を振り返るよい機会を与えてくれた教え子たちに心から感謝したい。

梅のかおり

—先輩校長から—

二人で歩く

前・常陸大宮市立大宮中学校長
堀江　勝義

いつ始めたのか定かではないが、夕刻のウォーキングを始めて多くの年月が過ぎました。

雨の日は傘をさして、酷寒・雪の日は防寒着を着て歩いてきました。

今年のように猛暑日が連続しても休まずに歩いてきましたがあまりにも暑いので、近くのスーパーで涼んでから、帰宅したものでした。

健康のことを考えて始めたウォーキングですが、よくもこんなに続けられたものだと思います。一人で始めたとしたら、こんなに長続きはしなかったと思います。やはり、一緒に歩き続けてくれたパートナーの存在が大きかったと思います。

今日は休みたいなと思っている時、「行かないの？」の一言で条件反射のように歩きだすことができたのですから。

一人では長続きしないことでも相手がいればこそです。

これからも、春は花や若葉の香りを楽しみ夏は熱気を肌で感じ、秋は紅葉と虫の鳴き声に押され、冬は肌を刺す寒風に立ち向かうことのできる四つの季節を楽しんでいきたいと思います。

幼児教育に携わって

前・那珂市立瓜連小学校長
髙津戸　要一

退職後、那珂市立幼稚園で二園の兼務園長として幼児教育に携わっています。まだ半年間ですけれど、小学校での教育と幼稚園での教育の違いに戸惑いや素晴らしさを感じています。

まず、大きな違いは、園児は遊びをとおして様々なことを学んでいくところにあります。つまり、遊びが重要な学びの場なのです。園児が遊びに熱中するなかで、自然物や人とのかかわりが豊かになり、充実感や達成感を味わったり、人間関係を学んだりしていくのだと思います。また、幼稚園には「いれて」「いいよ」という、園児達が遊びの輪の中へ入り込める素晴らしい言葉があるのです。

次に、登園・降園は保護者の送迎です。そのため、その折に短い時間ですが、園と保護者とのコミュニケーションの機会があり、信頼関係を構築しやすいところがあります。

さらに、昼食はお弁当です。園児達のお弁当には、保護者の「ビタミン愛」がいっぱいにつまっているのです。

今後も、園児達に「夢と自信と意欲」を育てるために努力してまいりたいと思います。

ある書物より

前・日立市立大久保小学校長
春山　武聖

「・・・スケジュールがいっぱいの日なら『これだけ自分を必要としている方がいる。ありがたいことだ。』と考えるのである。間違っても、『ああ、今日も時間がない。予定見ただけで疲れる』などと思ってはいけない。朝の出だしを（ヨッシャーと）ポジティブに始めれば一日を爽快な気分で過ごせる。反対にネガティブな（暗い）思いで始めてしまうと、何もかもマイナスモードに入ってしまう。会社（学校）で新しいプロジェクトをまかされたとして『期待されているんだな。よし、がんばろう』とポジティブモードになるのと、『なんでオレなんだョ。新規プロジェクトなんて苦労ばかりだ。』とネガティブモードになるのとでは差はあまりに大きい。」

（「いい言葉はいい人生をつくる」斉藤茂太・著）

※子どもは、常に大人（先生）をよく見ています。子どもを育てる環境の家庭や地域、そして学校（先生）が、常にポジティブモードであれば、子どもたちも・・・。いかがでしょうか。

多忙極まる中大変でしょうが、校長先生自らヨッシャーと元気モードを発信され、一層の人間力溢れる学校づくりを期待します。

『海に行ってきた』

前・神栖市立植松小学校長
田山　憲司

七月の大潮の日に海に行った。住んでいる家の近くの海だ。

「大潮」の言葉で、分かる人には分かる筈だ。海を眺めに行ったことではないことが。

風は無く、海岸線の道路に沿って屹立する風車はどれも羽を休め、働く気配が無い。

けれども、青々とした海は繰り返し繰り返し波を寄せ、働きを休める気配が無い。

風車と海の間に長く連なる白い砂浜を軽四駆で走る。ハマグリの採れそうな場所を目指して進む。照り返す光が目に痛い。

当方、ド近眼で緑内障故か、反射光が特別に目に障る。目を細めながら、先行車が残した轍の跡を追いつつ進む。

海はいい。冷たくていい。静かに波が体を打ち、時に重く厚く力強い波が体を倒そうとする。波に正対しないようにして踏ん張る。足の裏にはハマグリの感触がある。波に負けたらハマグリは流されてしまう。堪えた体を屈めて押さえてある貝を手で採る。心の中に喜びが湧く。

波に揺られながら、体を左右に揺らしながら砂の中を漁る。

一時間でバケツ三分の一程の収穫に、買ったものとは別段の喜びと、妙なる懐かしさがある。

カナダ イエローナイフへの旅

前・阿見町立阿見第一小学校長
庄子　一男

退職したらと、かねてより念願の一つであったオーロラ観賞の旅に出ました。十数年ぶりの海外。成田を出発し、十数時間の飛行。機内では日本語の新聞はない。流れてくる映像は英語と韓国語だけ。やっと着いたバンクーバー空港では、ツアー参加なのに日本人は妻と二人だけでした。カルガリー行きの次便のゲイトでは、チケットを見せると呼び止められ、予定した飛行機に乗れませんでした。「何でどうして」と、言っても通じない。荷物は送られてしまい、二人だけとり残され、こんなことはあるはずないと思っていたことが実際に起こりました。次のカルガリー空港では、案内されたゲイトが間違っていて、出発真近にあわてて乗り、やっとの思いでイエローナイフ空港にたどり着きました。空港では日本人の添乗員さんが出迎え、そこで初めてツアー参加の数名の日本人に会いました。ほっとした瞬間でした。イエローナイフは気温十四度。日本との時差は十六時間。短い秋の気候でした。肝心のオーロラは、一日目から、すばらしい感動的なオーロラを見ることが出来ました。百聞は一見にしかず。海外旅行はくせになりそうです。今、私の車の中では、英語が流れています。

広く深いきずな

元・利根町立利根中学校長
大塚　津多子

主人が脳梗塞を患い、リハビリ治療を受けるようになって八年、右マヒはあるが左手でほとんどのことが出来るまで回復し、デイケア先でほのぼのとした交流をもつようになっている。

九四歳のMさんは俳句づくりに挑戦、施設内の掲示板に作品が展示されるのを楽しみにしている。主人は俳句歳時記や俳句の雑誌等をひもとき、丁寧にメッセージを書く。私は彼女や利用者のため、色画用紙とマジックの色を選び、心を込めて作品を書くのを手伝っている。

また、龍ケ崎民謡の会発行の紙芝居「女化のきつね」「牛になった小坊主」を紹介し、実演してみた所、楽しそうに紙芝居に見入っていたお年寄達からは、内容への質問が出たり、次回の出し物への期待の声も聞かれるようになって、おしゃべりの輪が広がっているという。

主人は、作品の温かい心を伝える練習を積み、従業員が作ってくれた木枠を使って、今では「各地の民話や昔話」等レパートリーを広げている。

無縁社会とか、所在不明の高齢者問題が大きな社会問題となっている今、職場や地域、趣味のサークル等で、交流の場が広がり、温かい笑顔のきずなが深まることを願っている。

「社会貢献を求めて」

前・坂東市立岩井第一小学校長
霜田　定二

三十八年間の教員生活を振り返ってみると、たくさんの先輩諸氏のご指導と同僚との切磋琢磨があって、悔いのない日々を送ることができたことに感謝している。

これまでは、家庭生活での細々としたことを二の次にすることが多かった。今、一つ一つを見つめ直しながら整理整頓をしている。特に、古い写真には様々な思い出が詰まっている。学校行事や児童生徒との触れ合いの中で、精一杯に取り組んできた自分自身の半生を懐かしく思い出し、教師生活の余韻を楽しんでいる。

退職した四月は、気抜けした不安定な日々を送った。お礼の挨拶を出そうしている矢先、先輩から先に、労いの手紙を頂戴した。「桜の名所」を案内して頂いたので、出掛けたら葉桜になってしまっていた。自由な時間を活用し、近間での旅行へ出かけたり、読書に親しんだりすることができるようになった。

いよいよ、残された日々を社会貢献に寄与したいと決意を新たにしているところである。

「異　常　？」

前・桜川市立大和中学校長
小林　武廣

今年の夏は異常な気温上昇が続き、各地で最高気温を更新した。

私はこの四月より市の家庭相談員として週三日勤務している。小中学校・幼稚園・保育所・家庭訪問等を通じて、虐待防止をメインに要保護児童の見守りが主な仕事内容だ。

それにしても、最近おかしなことが相次いでいる。児童虐待・親殺し・子殺し・所在不明高齢者・消えた子どもの問題等々。社会全体も異常な状態に突入しようとしているのだろうか。何が原因なのだろう。家庭の崩壊、親子の情、絆が薄れてしまっているのだろうか。あってはならないことが平気で起こっている。異常があたり前になってしまっては大変なことになる。

大人を教育する機関は残念ながらない。大人になってからではもう遅い。校長としての現職当時を振り返ると、やや早急に結果を追い求めていた面もあったかもしれない。しかし、本当の意味の教育の成果はすぐに出るものではないのかもしれない。時間はかかるかもしれないが、知育偏重でなく知・徳・体バランスのとれた心優しい子どもを育てていくことが何より肝要だと再認識する。

現職の先生方に、教育の本質を見失わないで頑張るようにお願いするばかりである。

支部だより

東茨城郡

創意と活力に満ちた学校経営を目指して

東茨城郡学校長会は、小学校二十三校、中学校八校の計三十一校で組織・運営されている。

本年度は、森保会長（大洗町立磯浜小学校長）を中心に、小学校再編計画（二十三年度の城里町、二十四年度の大洗町）を見据え、三町の教育委員会と密接な連携を図りながら、「学校の教育力や組織力を強化し、子どもたちの人間力を豊かにすること」を重点目標として、研究と実践に努めている。

本年度の主な活動

一　管理職としての研究と実践

○小学校長研究協議会
○中学校長研究協議会
○講師を招聘しての講演会

二　組織活動の充実

○年五回の学校運営研修会
○各町定例校長研修会

三　教育諸条件の整備・改善

○業務の軽量化の推進
○学校予算充実のための要望

高萩市

二十一世紀高萩ビジョン　次世代「萩っ子」の輩出を目指した創意と活力に満ちた学校づくり

高萩市学校長会は、小学校五校、中学校四校の校長で組織・運営している。市教育委員会との連携のもと、蛭田隆久会長（高萩中学校長）を中心に、「一人一人を生かす創意と活力に満ちた学校づくり」の具体化を目指した研究と実践に努めている。特に、ユニット5（五校の小学校区の連携）の推進を図る中、学力の向上と萩っ子の育成に取り組んでいる。

一　管理職としての研究と実践

○学校教育目標の達成を目指す学校経営の充実（スクールマニフェスト・人材育成システムを活用した実践）
○創意を生かした特色ある教育課程の編成・実施と評価改善（幼小・小中の段差解消と学力向上を目指したユニット5での小中連携）

二　学校現場からの教育改革

○事業及び組織の見直し
○行政機関と連携した研修等（茨城大等との連携による算数・数学等の授業研究）

三　教育諸条件の整備・改善

○学校予算充実のための要望
○業務の軽量化の推進と子どもと向き合う時間の確保

つくば市

「夢・感動のある楽しい学校」づくりを目指して

つくば市学校長会（会長　櫻井一美　筑波西中学校長）は、小学校三十七校、中学校十四校で組織され、「教育日本一をめざして」の市政方針のもと、市教育委員会等、関係機関との連携を図り、地域の特性を生かした創造性ある学校経営の推進に努めている。

一、本年度の活動目標

(1)　管理職としての研修・実践
(2)　組織活動の充実と発展
(3)　教育諸条件の整備・改善への取組み
(4)　関係機関・団体との連携強化

二　重点を置いて推進する教育

(1)　環境教育
(2)　国際理解教育
(3)　学校ＩＣＴ教育
(4)　科学技術教育
(5)　キャリア教育
(6)　健康・安全教育

三　各校における共通実践事項

(1)　中学校区による連続した学びのある小中連携・一貫教育の推進
(2)　授業の工夫改善による学力向上（研究指定校制）
(3)　教職員の勤務意欲の高揚を図る業務の軽量化の推進

稲敷郡

創意と活力に満ちた学校づくりの推進

稲敷郡学校長会は、美浦村四校、阿見町十一校、河内町六校、計二十一校（小学校十五校、中学校六校）で組織運営されている。栗山恒男会長（阿見第二小学校長）を中心に、学校の現状や課題を分析し、家庭・地域社会、関係機関との連携・融合を図りながら確かな学力と豊かな心、健やかな体をもった児童生徒の育成に向け、研修と実践に取り組んでいる。

一　本年度の課題

○創意ある教育課程の編成・実践と評価・改善
○学校課題の明確化と迅速で的確な対応
○家庭・地域社会・関係機関と協働した子どもの安全の確保
○業務の軽量化による子どもと向き合う時間の確保
○新しい教員評価の実施、新人事評価の試行をとおした教職員の資質と力量の向上

二　本年度の主な活動

○学校経営・運営上の諸問題の研修
○各種大会へ代表者の派遣

坂東市

生きる力を支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」をもった児童生徒をはぐくむ、創意と活力ある学校経営を目指して

坂東市学校長会は、小学校十三校、中学校四校、計十七校の校長で組織・運営している。市教育委員会と連携し、野本会長（南中学校長）を中心に坂東市のより良い教育を目指し、「学力向上」「心の教育」「体力の向上」に全力で取り組んでいる。

本年度の重点課題

一　創意と活力に満ちた学校経営の推進

○教員評価・新人事評価の活用

二　学び合う姿勢を基盤とした確かな学力の向上をめざす教育活動の工夫改善

○学び合いのある授業の推進

三　心の教育の充実と生徒指導の総合的推進

○小中連携による不登校の未然防止と解消

四　家庭・地域社会に開かれた教育活動の推進

○コミュニティスクール研究

五　現職教育の改善と充実

○意識改革と校内研修の充実

編集後記

先輩の先生方、各校の取組み等の一文一文、一言一言にその意味深さを感じます。ご多用の中、ご寄稿くださいました先生方に心より感謝申し上げます。